



発行日 ***2010年10月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

一部50円です

稲刈り



最寄りの駅から帰る途中、住宅に囲まれた一反程の田に、稲束が二段にかけられた稲木が目に入った。周囲には、木造モルタルの住宅やコンクリートの建物がある。その間に一反程の田圃が残されている。ひと昔前は、ここも一面に広がる田圃地帯であったに違いない、そんな事を考えながら昔の田舎の秋のひとコマを思い出した。

我が家の田圃は、山と川にはさまれた河岸段丘を切り開いた棚田に点在していた。サコと呼んでいた箇所には、一坪ぐらいから半反ほどの小さな田が7枚、村道の下に連なっていた。

秋の刈り入れ時になると休日や学校帰りに手伝わされたものだ。稲刈りカマで刈って藁でくくって束にしたのを集めて担げる程度の大きな束にして道

まで持ち上げるのである。刈り入れは天気は左右されやすく休日だけという訳にはいかない。学校帰りに母や父が稲刈りをしている姿を見かけると「早く家に帰って着替えて手伝え」と言われた。私は急いで帰って柿で腹ごしらいをして田へ行った。中腰でする稲刈りは腰が疲れるので、刈り取った稲束を道まで担ぎ上げるほうが楽だと思っていた。最初は軽々と担いで畔道を上がれるのだが、そのうち疲れてきて腰かけて休むようになる。母と父は休むことなく稲を刈っている。今日中に片付けてしまいたいのである。稲は素肌に触れると、はしかくて、担ぐと首筋が痛がゆくなる。畔に植わった柿木の柿を食べ茶を飲んで荷揚を繰り返す。夕暮れがせまって暗くなりだすと、父は急いで荷車に稲束を積み始める。私も手伝って出来るだけ高く積み上げる。人が引く荷車の時は多く積みなかったが、耕運機を使うようになって多く運べるようになった。

2キロばかりの砂利道を運んで家の横に建てられた稲木に着く頃には、夕日が山にかかり真っ赤な夕焼け空になっていた。稲木の横に稲束を運び上げて稲束を稲木にかけなければならないから作業はつづく。家の外灯が照らすわずかな光を頼りに、父は十段からある稲木にはしごをかけて登り、私が下から差し出す束を手際よくかけていく。かけ終わる頃にはあたりは真っ暗闇になっていた。そんな日の夕食はきまってソラマメの豆飯であったように思う。

長い付き合いの安寿さんの話である。
静岡で製茶業を営んでおられた父上のご臨終の様子を聞いて、私は不思議な事もあるものだと思った。

或る晩、老いた父が息子である弟に、「ちょっと出かけなければならなくなったので、頭を剃ってくれないか」とたのんだ。弟は、

「今晚はしなければならぬ仕事が多くありますので、遅くなりますがいいですか？」と答えると、父は、

「待っているから」と言った。

弟が仕事を済ませて製茶工場から母屋に帰ると、もう夜中の12時であった。父は、風呂に入り身ぎれいにして待っていた。

弟は、いつものように剃刀で父の髪の毛を剃った。剃り終わると、父は床についた。翌未明の3時に父は黄泉の世界へ旅立ったという。安寿さんの老父は、死出の旅立ちのときを予知したように、身じまいを整えてから亡くなった。

こんなことがあるのだろうかと思は不思議でならないのである。他人の死期を知る事などは出来そうにないが、せめて自分のその時は自覚したいと思う。死期を悟るということは凡人に出来るだろうか。

梵店主

キャラバン二日目の朝も早い。昨日と同じポーター達が来てくれて荷を運び上げてくれる。

標高が高くなるにしたがい歩くピッチが下がる。三千五百を高度計がさす頃から、由べえと山猿が倦怠感や頭痛を訴え出した。

よっちゃんは、ヒマラヤ経験のある石川先輩から「高度障害は四千と六千あたりで出てくるから、とにかく水を多く飲んで、頭が痛くなったら百でもいから下ることや。無理したらあかん」と言われていた。

詳しい地図や写真もなく大まかな予測でキャラバンをしているのであったが、昼過ぎに氷河の舌端に到達した。見上げるとピラミットの形をした山が二つ見える。地図と地形を見比べ左の山が我々が登る山であると確信する。

意外と早くベースキャンプを設立することになった。もう少し上にしたかったのだが、氷河が谷を覆っている雪上に作る危険性を考えて氷河の切れ落ちた所から少しばかり離れたモレーンと思える石ころが堆積した小高いところにテントを三張り、食料、装備用のテン

トを一つ建てた。

経費を抑えるために缶詰類を一切けずった。肉は現地調達だ。羊を一匹買って連れてきた。さっそくポーター達が解体してくれた。手早く処理して食べやすいように肉切れにして食器に並べた。彼らにすれば、羊を一つというのには特別なご馳走である。我々は、ポーター達に感謝して食べられそうな肉をより分けて、毛皮などあまりの部位は彼らにやった。彼らは、その全てを大事に持ち帰った。

大事に連れてきた羊を目の前で殺して、生暖かい肉を貯蔵すべき法を知らなかったことや肉に飢えていたこともあって、待てずに直ぐガス火で焼いて食べてしまった。少しも残さず全部食べた。満腹感で喜んだのも束の間、腹がガスで膨れてきた。これはえらい事になったと、すぐに抗生物質の強いカプセルを全員が飲んで寝た。肉は寝かすことが大事だと思つた。幸い、それ以上腹痛がひどくなることはなかった。

ベースキャンプを張った次の日は、装備点検とルート工作を行なう。初めて経験する氷河の登山である。氷が硬くアイゼンが刺さりにくい。氷用のスクリューハーケンも使いにくい。スノウパーと呼ぶアルミ製の三〇センチほどの杭が効いていそうな感じであった。

氷河の先端部は急な壁になつていが、その二十メートルの氷壁を登った上は氷の上に土砂が堆積し、なだらかなルートがとれた。

初めて歩く氷河の上には、小川のよう流水が流れている。クレバスの割れ目も少ないように思えたが、間違いなくクレバスは隠れて見えないだけで、いったん割れ目に落ちれば助からない。

よっちゃんは、キャラバンの途中で高度障害に一度かかったが、概ね元気であった。隊長の村松も全く高度の影響がなくて張り切っている。

問題は山猿と由べえであった。彼らは、パキスタンに着いて飛行機から出た瞬間から下痢が始まり続いていなのである。二人とも元々下痢症であつた為か神経が繊細なのか、ラワルピンディーの空港の暑さと何んとも言えない匂いで腸が過敏な反応を起こしていたのである。しかし、その程度の事で弱音を吐く二人ではなかつたが、隊長の目には体調管理が悪いと映っていた。

遠征隊では長い期間生活を共にするから、人間関係には注意を払わなければならぬ。好きな山であつても若い男同士であるから腹が立つことも出てくる。各自の分担をそれぞれ決めて日程をこなしていくのだ。

が、天気や各自の調子などで変わってくる。高山では、ちょっとしたことにも過敏に反応するようになり、いざこざがたえない。大ごとになる前におさめなければならぬ。

隊長はよっちゃんより三つ年上である。彼は神戸高校を出て、医学部を目指したがかわず工学部へ進学して、大手機械メーカーの設計の仕事をしていたためか、または理系によくある傾向の性質からか。非常に合理的・論理的でマイペース。しかも一番の年長者であるから、間に立つよっちゃんは苦勞したのである。

山はチームワークによつて安全に登れる。大喧嘩に発展するようなことになれば、たちまち分解して登山することは出来ない。過去多くの遠征隊が人間関係でうまくゆかず、軋轢を残して登れずに帰ってきている。みんながピークに立ちたがるが、それまでの荷揚げやルート工作などの困難な作業は地味で出来れば少なくしたいと思つているのだ。

しかし、誰かがその仕事しなければルートは作れない。ヒマラヤに行った先輩は、よっちゃんに「社会人たちの混成パーティーは大変だ。やっぱり気心の知れたうちの山岳会メンバーと行くのがいい」と言っていた。

よっちゃんは、現役るとき一度だけ一緒に剣岳早月尾根に登つたことのある隊長であつたが、何とかなると思つていた。山猿と由べえは隊長と一度も山行を共にしていなかつたが、心配はしていなかつた。

義兄がガンになってから私の姉の「経済観念」が、それまでと180度変わった。と、書くと「主人が働けなくなったので、縮まり屋になったのだろう」と思われるかもしれないが、姉は逆だった。何故かわからないのだが、お金を湯水のように使い出したのだ。

サラリーマンの嫁で、専業主婦の姉は、10円単位のお金もきつちりと管理していて、たとえば、母から頼まれた買物でも「ハイ、498円ね」と請求し、500円玉を渡されると、きちんと2円のお釣りを返した。私が姉に頼まれた買物で、お釣りを渡し忘れ、「昨日、姉ちゃんに200円のお釣り渡すの忘れてたワ」とか言う。「そうやんか。でも、もうええけどな、使途不明金で処理していたから」などと言う。家計簿に「使途不明金」なんて項目があるのかどうか知らないが、それぐらい姉はシビアな金銭感覚で生きていた。

そんな姉が、義兄が入院してから、ブランドのバッグを買ったり、大して吟味もせず、バカに若向きのコートを買ったり、果ては、「夫がガンで入院してんねんから、ホンマはそれどころやないねんけどな、友達が困っているから、お金、あげてん。〇〇(義兄の名前)にはナ

イショやで」と言うではないか。「えーっ、いくら？」と驚いて私が聞くと、姉はケケと笑って「言ええない」。たぶん、100万円ということはないはずで、30万円ぐらいだろうと思うのだが。

実は、姉は気前が悪い人ではなくて、たとえば、弟の結婚式のお祝いはダイニングテーブルセットと現金で50万円ぐらいポンと出していた(思えば、義兄のお金だ!)。当時、義兄は東京に転勤していて、姉と息子も一緒に行っていたので、往復の新幹線代だの息子の背広代だの「百万円仕事やわ」と言っていた。その後も、弟がパソコンを買うといえ、5万円カンパしたり、弟の子どもが入院したといえ、
「お見舞い」の範囲をはるかに超える金額を包んだりしていた。

一方で、無意味なお金だと自分で思えば、10円でも払わない。たとえば、弟一家、母と私(父は昔に死んでいり、それに姉夫婦で、外で食事をしたり、遊びに出かけるときがたまにあるのだが、姉はきつちりと義兄と自分の分を計算して、その他大勢の分は払ってこない。ただし、自分たちの分までは払わせない。(あ、こういうとき、というか、すべてのとき弟一家は一銭も払いません。ピンボーではないのだが、末っ子カップルで、弟も嫁も

「こつこつあんです」性格なので。嫁の実家では、嫁のお父さんが払い、弟の実家では母か私が払う。私がいれば100%私が払う。別に払いたくはないのだが、弟夫婦がそういう人たちなので泣く泣く…。弟の子どもたちが可愛いので、ま、いいかってことで)。姉は「なんで、あの子らの分まで払う必要があんの。アンタもいっかげんにしときや」といつも言っていた。

そういう金銭感覚の姉が変わった。義兄が退院し、通院治療もひと段落した春、弟一家や母などいつものメンバーで奈良に桜を見に行ったのだが、そのとき、姉のしたことは、こぶりのサイフにお金を入れ、それをポイと義妹に渡して、「奈良で使うお金は全部、ここから払ってな」。

桜の木の下でのお弁当やビールや、その他もろもろが、その財布から払われた。日帰りの奈良で、そんなにお金を使うわけないが、それでも人数が8人となると、2、3万円は使ったはず。それぐらい、たまにはいいのだろうけど、今までの姉のシビアさに慣れている妹として「フシギ」。

その「フシギ」が、ずうつと続いていて、姉は義兄に飲ませるため、高価な健康食品を何種類も買い込み、義兄が「いいよ、こんなに高いもん」と言うのと、「それが、すごい安かってん!」と過少

申告したり、あるいは、義兄の飲み物にこつそり混ぜたりしていた。

健康食品だけではなく、食べ物にも惜しみなくお金を使い、たとえばウナギひとつとっても「国産は当たり前、天然モンでない」と〇〇には食べさせられない」と買い求め、それを自分も食べ、息子一家にも食べさせるので、姉の息子、私にとつて甥っ子が「あんなことしてて、大丈夫なん? オレ、むちゃ心配やねんけど」と私に言った。この息子、幼児の時によく、もやしのことを「ももし」と言っていて、それはそれで可愛いかったのだが、いかに姉がこの子にもやしを頻繁に食べさせているかがわかって、不憫だった。だって、もやしって今も昔も一番廉価な野菜ですから。

金銭感覚を変えた姉は、息子一家と私を、白浜一泊旅行にご招待してくれた。海の見える、広々としたきれいな部屋だったが、姉はフンと鼻をならし、「あの子らにホテル予約させたら、チンケな部屋やわ。ごめんな」と本気で私に囁いた。

義兄、リストラ寸前のサラリーマンで、現在、ガンのため休職中。復職のメド立たず。姉、手に職のない専業主婦。
うーん! 姉の息子の甥っ子よ、私も心配だ。

具志 清

邂逅

高井隼人は、昭和四十五年初夏、一通の封書を受けた。差出人、里見京子という名が思い浮かばなかった。住所は東京都である。首を傾げつつ開封した。読み出すとすぐに解った。

拝啓 突然ながら御免下さいませ。

わたしは二月に嵐山でお会いした者でございます。覚えていらっしゃるでしょうか。あの時はご親切にして頂き、有り難う御座いました。もっと早くお礼のお手紙を差し上げるべきでしたのに、こんなに遅くなり失礼致しました。かえってご迷惑ではないか、とためらっているうちに春も過ぎてしまいました。

大事な貴重な時間を、こんな拙い文でお邪魔しますことをお許し下さい。

嵐山は、わたしが生まれる前に、父と母が二人で歩んだ京都名所の一つなのです。太平洋戦争の末期の頃です。

当時、父は京都大学に学び、龍安寺の近くに下宿していました。父は、四条河原町の近くにあった喫茶店に入り、西洋音楽を聴くのが楽しみだったそうです。そのお店で働いていた母と知り合いま

した。

お礼を述べるつもりで筆をとりましたのに、おかしいですわね。でもどうか、父と母のことを書かせて下さい。暗いくらい時代におそろしいほどの幸せを感じていた、と母は話していました。

父が学徒出陣で戦地へ赴くことになり、父と母は最後の一日を嵐山で過ごしました。そしてその夜、母は東京の御両親の元へ帰る父を京都駅で送りました。母も、間もなくお勤めを辞め、帰郷しました。母の実家は山陰の山奥の貧しい農家でした。

戦争が終った時、わたしは一歳を過ぎたばかりでした。

終戦から二ヵ月ほど経ったころ、一人の復員兵が母を尋ねて来ました。その人は、父の戦死を知らせに来たのです。母は、父の手紙を渡されました。

*

貴女への最後の手紙になります。

愈々出撃します。

神州不滅を信じ、祖国に殉ずることと何等の不安もありません。

貴女との一年余の時間でしたが、僕の人生でもっとも充実した日々でした。

貴女との想い出を胸に秘め、飛び立ちます。

戦争はやがて終るでしょう。祖国

日本に平和と自由そして繁栄が蘇るでしょう。

その日のために僕たちは行きます。今となっては、唯ひたすらに、貴女のために祈るのみです。

家族に引き合わせる機会がなかったのは甚だ心残りですが、貴女のことには知らせてあります。

貴女と共に散策した吉田山、京の町並み、神社仏閣、庭園等が、走馬灯の如く、脳裏を駆け巡ります。

貴女への愛を語りながら、僕は自分の置かれていた時代と立場を認識する知性がありました。また、自分の運命も予想はしました。

戦争が終ったら、僕のことには気に留めないで貴女自身が幸福になる事のみを念頭に生きて下さい。

生き残った男たちの中に、僕よりずっと素晴らしい奴がいるでしょう。どうか無責任な言い方とは思わないで下さい。

貴女の御両親ともお会いしたかったです。呉々もよろしくお伝え下さい。書きたいことが胸の底に溢れるばかりにあります。うまく表現できません。

香織さん、さよなら
わが愛する祖国の麗しき山河よ、さよなら

香織さん、さよなら
わが愛する祖国の麗しき山河よ、さよなら

*

わたしが中学生になった時、初めてこの手紙を読まされました。父のことはそれまでいろいろと母から聞いてはいましたが、これを読んだことで、母が独りでわたしを育ててくれた意味を識りました。なぜ、わたしのことを父に告げなかったのか。母に問うたことがあります。

「そういう時代だったのよ、お国のために戦地へ征かれる方に、余計な心配をおかけしてはいけない、と思ったの……」

母は、遠くを見るような目をして答えました。

母は父の手紙を受け、二、三日後に、わたしを両親に預け、上京し、父の家を尋ね歩きました。数日方々探し回った挙句、父の一家は空襲で全滅したことが解りました。母は疲れ果てて帰りました。

母の戦後は、父との懐かしい思い出が心の支えでした。わたしの育児を両親に託し、東京へ出ました。酒場の、



女給など様々な仕事に就き、年に幾度か帰郷し、わたしに会うのが楽しみで、わたしの成長だけが唯一の生き甲斐だったそうです。

その母も去年の暮れ、病死しました。母方の祖父母も既に亡く、母は一人っ子でしたので、わたしは天涯孤独の身となってしまいました。

貴方様にお会いしたあの日は父と母がこの世で語り合った最後の日と同じ月日でした。渡月橋を渡り、河原に降り、川瀬のほとりに暫くしゃがんでいました。この清らかな流れの遙かかなたに、父の眠る南の海が広がっているのだ、と思いました。

わたしは母の遺髪的一条を深紅の色紙に包み、小雪を乗せゆく川波に、そっと置きました。その小さな折り紙の舟は、川石の合間を漂いながら静かに流れながれ、やがて見えなくなりました。わたしは立ち上がりました。心の中で叫びました。

「お母さん！お父さんのところへ、きつとね、必ずね……」

幼稚な感傷、とお思いでしょうか。お礼を申し述べようと書き出したのですが、つい長々と私事を書いてしまいました。お読み頂いて有り難う御座いました。

益々お元気で過ごして下さいませ。

かしこ

死から生への問い 人生と何か

祖蔵哲

人生に意味があるのか。この問いは歴史的にも様々な思考ジャンルから考えられてきました。人間の活動自体がこの意味を探し出すことであるといつても過言でなくらいです。芸術、哲学、宗教、科学ですらそうであるかも知れません。

まず宗教の分野からその考え方をみていきましょう。仏教のある宗派では「阿弥陀の救い」を願うのが人生の目的であり、生きるのではなく生かされていくのだと教えています。キリスト教では現世で生きる目的は来世での復活に揃えるためとしています。簡単にはいえませんが宗教では大体、神や仏という他者によって生きるというのが基本的な思想です。他方本願です。そして重要なことは考えるということではなく信じるということ。人生の意味は信じるということが宗教の本質です。

次に哲学はどうでしょうか。哲学というものはある部分では科学と共通的なところがあります。それは一切の前提を取り払うことから出発するからです。思い込みや独断など根拠のないものは排除します。しかし哲学も現代の科学の急激な発展には大いに影響を受

けており、前提として科学的発見を採用することもあります。たとえば現代科学では宇宙はやがて収縮して消えると考えています。これを前提に哲学では「人はそれぞれ根拠なく生れ、意味なく死ぬ」とい考え方が主流になっていきます。こう言うと身も蓋もないように聞こえますが、逆に生は永遠にづくこと考えると、現在の人生は一瞬の出来事になってしまいとてもはかないものになるということが理由であるらしいのですが、またその意味というものを考えるとどこまでも無限に大きなことが考えられてしまうことか

ンクルがいます。かれはユダヤ人であるがゆえに第二次世界大戦中収容所に入れられ極限状態を生き抜いて有名な「夜と霧」を著しました。収容所で彼はさまざまな体験をしています。もともと医者だった彼は患者からいろいろに相談をうけていました。その多くは人生になにも意味がない、生きていても仕方がない「もう生きる希望がない」というものでした。しかしフランクルはそうではない、どんな時にも人生には意味があるといいました。そしてあなたを必要としている人が必ずいるはずだ、その人のために生きようと話したのです。ある人は残してきた家族のことを想い、ある人はいまだ巡り逢えぬ恋人のことを想い、また生きることを始めたらしいのです。彼は戦後も生きながらえて多くの思想的な業績を残しています。が極限の実体験の裏づけがあるだけに説得力があります。

文学での表現ではどうも人生の意味はその意味を探し求めること自体であるとの結論が多いように思います。主人公がいろいろな経験を経て最後に思うことはこれでよかったのかどうかという疑問符がついています。まだまだ人生の意味を探し旅は続くというわけであるようです。

さて宗教でもなく哲学でもない分野どちらかという心理学に近い精神医学分野の人としてヴィクトール・フラ

その思想のなかで注目すべきは「人生の意味を問うのではなく、人生は自ら人間の方に問いを発している。人間の方から人生の問いに答えねばならない」という発言です。この考え方はいままでみてきた私たちの方向と逆の立場です。地動説から天動説へのコペルニクスの発想の転換です。最初私がこの考え方であったとき正に目から鱗が落ちるといふ思いでした。

敷島 旭

先々月、衆議院議員、辻本清美さんが社会民主党を離脱された。辻本さんの政治的思想・信条などについては、ここで評価しようとは考えていないし、また私にそれほど見識もない。ただ、党を離脱した……ということは無理からぬことだと感じている。

そもそも、21世紀のこの時代には、最早、政党政治は成り立たないだろう。政党政治は明治時代に始まったが、その内容は私にはわかりにくい。中学校の時、立憲改進黨や自由党という名前を教わった記憶ぐらいいかない。しかし、太平洋戦争後にできた政党は、ある程度理解できる。特に55年体制と言われる自由民主党と社会党という対立軸はわかりやすい。資本主義経済体制の中で、自由な競争のできる社会をつくろうという考えの元に集合したのが自由民主党で、それとは正反対に、労働者を主役とした計画経済で資本家を排除するという社会主義の旗を立てたのが社会党であったのだろう。党の主張ははっきりくつきりしていた。

人民共和国とは呼ばれなくなった。一党独裁ではあるが、社会主義・共産主義の実態は無い。党は強硬な権力を有する村の会議のようなもので他の会議の開催を許さないだけである。時々、毛沢東語録を便宜的に使うだけのことに過ぎない。一見、思想・体制的には資本主義が勝ち残り、社会主義が負けたように思われる。しかし、不思議なことに、資本主義体制を選んできた日本は、今や中国より社会主義の国になっているというから話は複雑だ。中国では猛烈に資本主義が進展している。

結局のところ、イデオロギーでは食べていけないということだろう。科学技術の進展や、人口構成の変化、法制度や官僚機構の複雑化、経済面での国境のボーダーレス化、産業資本主義から金融資本主義への変質などのありとあらゆる環境変化によって、単純なイデオロギーなどは、時代の変化に追いつて越えて、はるかかなたに霞んでしまったと言える。こんな時代には政党政治は意味を持たない。毎日、菅首相がどうした……、小沢氏がうなずいた……、鳩山氏が（恥ずかしげもなく）挨拶に立った……などというニュースを見聞している、もう嫌になってしまふ。

思想信条などあったものではない。民主党も自民党も、どうでもいいように思う。これからは、議員に立候補す

る者は、皆、インターネット等を使い、自分の政策案、政治的信条を私たち一般大衆がわかりやすい言葉にして発表すればよい。国会では、それぞれの議員は、個別事案ごとに、賛否を決めればよいだろう。政党など法律で禁じてしまえばいいのではないか？ 暴論だろうか？

携帯エッセイ 24

「人生は楽しく」

人生最大の難問は『人生の目的』だ。《なぜ生まれてきたんだろう。なぜ死んでいくんだろう》

私は大学2年生の時にこの難問にぶつかった。時間が有り過ぎたからかも知れない。学園紛争でほとんど授業は無かった。クラブ活動も途中で辞めていた。学生運動に飛び込む気もなかった。本を読むしかなかった。「週間ほどバイトをして生活費を貯めては下宿かジャズ喫茶で、読書に耽った。哲学書や文学書、思想書を読み漁った。

しかし、人生の謎は深まるばかりだった。深みにはまったのか、厭世的になった。

若干18歳で「人生遂に不可解なり」との遺書を残して華嚴の滝に飛び込んだ藤村操の気持ちが理解できた。私

そのうち卒業し、就職して社会人になった。26歳で結婚し、子供が二人一生懸命に働いて61歳になった。まだ『人生の目的』は解らない。

今は半分、諦めている。「人生に目的などないのではないか」

そもそも自分の意志で生まれてきた訳ではない。なのに目的などあるのだろうか。最先端の学説では生命の根源である宇宙は『無』から誕生したという。無から生まれたものに目的などは無いはずだ。

それでも「生きたい」との意志はある。これは私の遺伝子が命じているからなのだろう。

したがって生きるのに《目的》は要らない。「なぜ」という問い掛けは放置し、その次の《方法》から、つまり「どのように生きるか」を考えれば良い。

これなら答えは出やすい。私の生き方は楽しむことだ。遊ぶこと、私を作ることを、酒を飲むこと、旨いものを食べることを、本を読むこと、音楽を聞くこと、カラオケで歌うこと、旅をすること、仕事をする、毎日なにか新しいことをすること……などなど。

探せば楽しいものは幾らでもある。幾ら時間があるに足りぬ。

しかし、人間はいつか死ぬ。これも自分の意志ではどうにもならない。

人生が長かろうと短かろうと「あく楽しかった」と言って死んでいきたい。《龍》

ものも(言葉) いいようで角が立つ。特に年をとってくると、人にはなかなか上手く言えない。「元気ですな」と言われたら「おかげさんで」と言ってしまう。

息子が訪ねてきても「もう年やわ」とも言えず、わざと元気に振舞って食べると言わずとも、一心に好きなものを作って「もうお昼や、食べて」と言う。

嵐さん薬局での続き

一ヶ月後の訪問。

「薬あまっていますやろ」処方箋もつて今度は、若いお兄さんが言う。

「十五日分を二つに割ったら三十日、くだいてもあまるはずない」と突返す。首をかしげながら局内へ消えた。

待つ事十分、おさげ髪の娘さん。

白衣をつけて「今度は一ヶ月出しましたのでどうぞ」

散々医者と薬局が検討した結果だろう。あのバアさんの口ぶりだったら大丈夫と判を押したのか、やたらと笑えて来た。

この薬、枕元に置いただけでも気が落ち着きますのや。ありがたいことにな。「お婆ちゃんのお守りさんですなア」と言う可愛い顔した受付嬢、にっこり笑う。

自分で現況を認め、言いたいことを言っている事を喜んでいようと思える。

誰が言っているでもない。自分に向けて書いている私。

年を重ねるといふこと

いつまでも元気でいい、気が若いことは幸福か。そりゃ本人は幸福かもしれないけれど、ハタ迷惑ということがあるだろう。とひそかに私は思う。

家族、縁者関係の悩み、戦争の体験もなければいまい。

でも、病氣も不幸も、人生で与えられた事には全て意味があると思うし、無駄な事は一つもなかった。早朝から同じ時間帯に犬の散歩で出会う。ヤアとにっこり笑うのみ、一寸の間。

現代住所不明の高齢者問題。亡くなったまま誰にも気づくかれない孤独死、身近で起きていることなのに親も知らない。どんな人、若い、老人なのと想像ばかりが走って何にもならない。

もう少し近隣の人たちと交流の場を持てる社会になれば、玄関のカギをかけ、窓から顔だけ出して社会を見る。あまりにも世間が狭すぎる。年を重ねるにつれて、つい此の間ま

ではつきりおぼえていたのに、急に何かに包まれたようになっていのに気づくことが再三。

パン屋さん

ピンボンとなる。「どなた?」「ホーヤホヤの手づくりパン屋です」。車に載せてパン屋さん来訪。「さて今日水曜日」約束の日だった。

にっこり笑って暑いのに前掛け姿で立っている。思わず余分まで買ってしまう。けれど悔いなし。「又来週ね」と別れる。とつてもそのパンが美味しいのだから不思議。

表通りに何軒かパン屋さんあるのにわざわざ待つてまで買わなくてもと笑うけれど、私は何か昔の物の不足時代に浸って、ついつい「誰にも迷惑をかけていません」と言ってしまう。

編集後記

今回から、具志清さんが「京鹿子幻影」という連載小説を投稿していただきます。具志清さんは沖縄生まれで、戦争で苦労された人です。忘れかけた戦争の悲惨さを思い返したいものです。

宅配便のドライバーが、集荷に來られて「九月になって集荷量が急減した」と言っていました。円高や中国などの問題が影響していると思われます。知り合いの店主は「同業他社が毎月十数件も大阪かいわいで閉店しているらしい。非常に厳しい状況であるが、年金がもらえるようになって少しは助かる」と言っています。

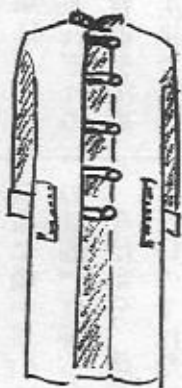
大手の企業は、リストラで上向きのようなのですが、それが出来ない零細企業はまだまだ底が深そうです。紙面の都合で、「異聞・幻のストラディヴァリウス」は次号に掲載予定です。(嘉)

『人気のデザイン』③

チャイニーズコート

*

着尺巾をいかしてお洒落に仕立てあがります。軽くて暖かいデザインです



着物から服を仕立てます

梵~ぼん~

